

特別インタビュー

全体論的戦略で課題解決

IWA（国際水協会）のトム・モレンコフ会長は10月25日、台湾・高雄市で開かれた第9回IWA-ASPIRE（アジア・太平洋地域）会議・展示会の会場内で本紙らの取材に応じた。水に関する日本の取組みへの印象や、基調講演で語ったSDGsゴール6「すべての人々に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する」の達成に向けた課題認識、水管理の持続性などについて持論を語ってもらった。2030年までのゴール6達成について「チャレンジなこと」としつつ、新興国の能力開発などを国際的な協力関係のもとで引き続き加速させていくことの重要性を強調した。

（取材に当たっては、モレンコフ会長と旧知の関係にある吉村和就グローバルウォータ・ジャパン代表に協力を得た）



IWA会長 トム・モレンコフ氏

——今回の会議・展示会には日本の上下水道関係者が多数参加しています。まずは日本の関係者の発表や展示に対する感想をお聞かせください。

優れた発表・展示が揃っており、とても嬉しく思います。日本はアジア・太平洋地域のみならず、国際的な水分野の議論の場で大きな役割を果たしてきました。私は開会式のあいさつでIWAに大きな影響を与えた人物として故・丹保憲仁北海道大学名誉教授を挙げ、その功績についてお話ししましたが、丹保教授だけでなく、これまで日本の多くの素晴らしい専門家がIWAに関わってきました。日本の関係者が大きな代表団を組み、展示会の場で「ジャパン・パ

——水分野における日本の海外貢献について、どのような印象をお持ちですか。

日本は数十年にわたって科学的研究や教育の面で重要な役割を果たしてきました。中国や台湾をはじめとする各国に知見を与え、地域間の友

会場の場で「ジャパン・パ

新興

好関係の構築にも貢献したと思います。

技術開発の面では、パイプやポンプ等だけでなく、電子機器についても大きな発展の最前線に立つてきたと思います。また、デジタル化が世界的に進む中、さらなる期待もかかっています。

日本が貢献しているもう一つの分野は、新興国に対する支援です。特にアジア太平洋地域は、開発に対するバランスの取れたアプローチが求められます。日本の支援策の素晴らしさは、日本にとっての経済的利益を条件にしない点にあります。

—23日の基調講演ではSDGsゴール6で掲げられた目標を2030年までに達成するには行動の加速が必要だとお話しになりましたが、私たちがすべきことは一体どのようなことなのでしょうが。

2030年まで、あとわずか7年です。残されたこの短い期間でSDGsゴール6の達成を目指すのは、非常にチャレンジングなことです。とはいえ、水と衛生の重要性は非常に高く、私たちが挑戦をやめるといふことにはなりません。

最も大きな課題は各国の能力開発だと思えます。かつて、ドナルド・ラムスフェルド（アメリカ合衆国第13・21代国防

長官）は「Known Unknowns（既知の未知）」や「Unknown Unknowns（未知の未知）」といった言葉を使いました。

水分野の現状に照らしてみると、多くの新興国では水・衛生が経済発展や社会の安全・健康に果たす役割について、大きな誤解があり、私たちは衛生の基礎について、より意識を高めていく必要があるのだと思います。

さらに、新興国の人々が水に関する課題を自ら解決できる能力を高める必要もあります。微生物等の研究者やエンジニア、水道事業者のトレーニングを行い、ソリューションを各地域の中で実装できるようにするということです。これは私たちが資金を提供したり、施設の建設を支援したりすること以上に重要だと考えています。

—日本では国の水道行政の移管が控え、移管後は下水道や道路、港湾など他のインフラ部門と同一の省が所管することになります。水とその他の管理の持続性について何かアドバイスするとすれば、どのようなことが挙げられるでしょうか。

立場上、特定の国の政治についてコメントすることは控え、一般論として

トム・モレンコフ会長 基調講演 水セクターに外向性求める

「The Decade of Action in Water—Must We Fail?」

第9回IWA-ASPIRE会議では、10月23〜25日の間に9編の基調講演が行われ、IWAのトム・モレンコフ会長は23日に「The Decade of Action in Water—Must We Fail?」と題して持論を展開した。国連の「持続可能な開発目標」(SDGs)において水と衛生に関するゴール6には大きな期待がかかっているが、今年3月の国連水会議2023で示された世界水開発報告書の最新版によれば2030年の目標達成に向けた取り組みの進捗は多くの観点で横ばい状態にあるとみられ、同報告書について「国際的な水危機の差し迫ったリスクを警告している」「都市部で水ストレスに直面する人口は2016年時点で9億3000万人だが2050年までには17・24億人に増加する可能性を示唆している」と概説。その上で「水が持続可能な方法で管理される未来を実現するには複数の課題がある。大切なのは解決に向けて何をやるかということだが、特効薬はなく、私たちにできることはグローバルリーダーが集まる会議で素晴らしいアイデアを出していくことかもしれない」などと述べ、世界の水セクターがより外向的になることの重要性にも言及した。

て話します。水循環について考える場合、取水から処理、使用、排出、再利用など、さまざまな段階における「水」を理解する必要があります。気候変動が進む近年の気象条件下では、貯水池が洪水防止の観点においても重要な役割を果たします。そうした意味では、物事が一緒になるというアイデアは好ましいものですが、実際にそれを表現するのがいかに難しいかと、私も理解しているつもりですが、異なる複数の部門が関わっている場合であっても、部門間が会話し、全体論的な戦略が構築できれば、多くの課題は克服できると思

国の能力向上が鍵

います。日本国内の水資源管理については何かを話せる立場ではありませんが、日本政府の水セクターには膨大な知識と能力を生かしました。



ジャパン・パビリオンの記念撮影 (前列中央にモレンコフ会長)

し、国際貢献などグローバルな活動をこれからも継続されることを奨励します。